大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『ルーツィエ・ゲルメロート』における無意識のプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩元, 修 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006140

『ルーツィエ・ゲルメロート』における無意識のプログラム

岩元　修

序

E.メーリケのノヴェレ『ルーツィエ・ゲルメロート』*Lucie Gelmeroth*(注1)の語り手は、ある士官の死をめぐる一連の憶測や後から判明した事実に関して、読者に客観的に報告することを、自らの任務としているように見える。読者はまず、士官の死が殺害によるものでありその犯人が一人の女性である、という憶測が巷間に存在することを知らされて読み始める。しかしその後で、実は彼女は無実であったこと、しかも士官の死は決闘によるものであったことが、事実として伝えられる。謎を提示してその解決に読者を同伴させるかのようなこの作品のスタイルに注目して、ベンノー・フォン・ヴィーゼは、『ルーツィエ・ゲルメロート』をはっきりと「犯罪(探偵)物語(Kriminalgeschichte)」(注2)と呼ぶ。確かにそれは、シラーの『失われた名誉ゆえの犯罪者』*Der Verbrecher aus verlorener Ehre*以来の、ドイツ文学における犯罪物語の系譜に属しているかのような印象を与えるであろう(注3)。しかし犯罪を犯す者が置かれた状況ならびに彼の心理の検証に力を注いだ、犯罪物語というジャンルに、当該のノヴェレを単純に分類してしまうことには、筆者は強い抵抗を感じてしまう。作品を注意深く読み進めば、ノヴェレの終わりにまで達せずとも、そのような分類がいかに表面的な観察から導かれたものであるかを、認識せざるを得ないからである。そして、ひとつの謎を提示し、その謎を解明してゆくという犯罪物語の形式を借りながらも、作品の意図は実は別のところにあったのではないかという思いへと傾斜することになるのである。

この作品で真に解明を必要としているものとは、犯罪と動機の因果関係、あるいは事件の真相という犯罪物語的な事象ではなく、むしろそのような事象を客観的に報告しているかの如き体裁をとりながら、実は一種の擬態のなかで隠蔽を行っている語り手自身の、内面に生起している複雑な心理的事件であるといえよう。探偵的な語りの進め方の裏には、メーリケのイロニーが隠されているのである。白日に晒すにはあまりにも微妙で、むしろ隠し続ける方が無難な問題を、作品はイローニッシュな語り方で、浮かび上がらせている。巧みなコノテーションを駆使したこの技法を見抜くことができない限り、『ルーツィエ・ゲルメロート』の魅力と重要性は理解できないであろう。表面的な筋ばかりを追い、もっぱらそこに解釈を限定すれば、作品にあてられる尺度は犯罪物語のそれになってしまう。そしてその尺度に照らせば、『ルーツィエ・ゲルメロート』は犯罪物語の筋運びという点で緊張感に乏しく、ドラマティックな展開が見られない二流作品という、低い評価を受けざるを得ないであろう。また犯罪物語を期待していた読者は肩すかしを食らわされ、失望することであろう。このような表面的でほとんど不当とも言える作品の読みは、しかし、ヴィーゼにも見られたように、最近までなされてきたものである。発表当時からメーリケの友人の間でもこの作品の評判は芳しくなく、また文学史的にも、ドイツのノヴェレ文学としてはほとんど顧られることがなか

った。

このテクストの正当な評価を実現するためには、その表面的な読みを脱皮して、テクストの深層を分析できなければならない。本論では、男性の語り手が自己に都合よく加工して読者に伝達している、ヒロイン(ルーツィエ)に関する情報を、極力批判的な意識を働かせて検証することにより、テクスト表面にできあがったヒロイン・イメージの欺瞞性を指摘することに力が注がれるであろう。そしてこのような読みを実践することにより、物語るという行為の裏に隠された語り手のコンプレックス ── それがテクストの深層に存在して語りのエネルギーになっているのだが ── に考察を加えることができるであろう。その暁には、『ルーツィエ・ゲルメロート』は、二流の犯罪物語というレッテルを払拭できるものと思われる。そして十九世紀前半の市民社会に現れたこのノヴェレは、当時のゆがんだ女性観と、それを維持するために男性社会が行っていた自己欺瞞を、自らの文体のなかに包み込むようにして「記録」した秀れた作品であることが明らかになるであろう。

I

作品の語り手をつとめるのは、主人公ルーツィエの幼なじみの「私」である。「私」は、士官リューネボルク殺害の下手人としてルーツィエが自首したことについて聞き、その後ルーツィエの無実が確定して彼女が釈放されるのにも立ち会うことになったが、当時はまだ学生であった。そしてその時の経験を学者になってから(何年経過しているのかは不明であるが)、回想録のなかに記録したことになっている。しかしその学者である「私」の残した回想録は出版されたものではなく、外枠の語り手が発見し整理して、いま読者に提供しているという体裁になっている。このように語りは二重構造になっているのではあるが、外枠の語り手自身は、「私は ── あるドイツ人学者がまだ印刷されていない回想録のなかでこのように語っている ── ゲッティンゲン大学の学生時代、休暇旅行の途中で、久しく見ていない生まれ故郷を、もう一度訪問しようと思った」(387)という出だしの一文に、ダッシュに挟まれた挿入文でかろうじて存在が知られるだけで、終始沈黙し、作品の終わりの「語り手の手稿はここで途切れている。私たちは彼の書いたもののなかに、あの逃亡中の商人の運命について何かを知ろうとしたが、無駄だった。そのほかにも照会したが、やはり同じであった」(402)という結びの文章で、何とかその存在を思い出させるだけである。それゆえ作品はほぼ全面的に学者の回想から成り立っていることになる。しかし、このわずかに顔をのぞかせる外枠の語り手も一定の機能を負わされており、少しは議論の対象にせざるを得ないであろう。それゆえ本論では煩雑を避けるため、事件に遭遇しそれを手記に残している学者を「語り手」と呼び、外枠の語りの担当者をあえて「(手記の)編者」と呼ぶことにする。

作品の表面的な筋は、序論でも述べたように、士官リューネボルクの死をめぐる事実関係の解明にある。語り手は、学生時代の休暇旅行で、生まれ故郷 ── もはや家族も住んではいないが ── を、久方ぶりに訪問する。町の旅館の食堂で誰にも彼とは認められずに食事をしていると、人々の口にルーツィエ・ゲルメロートの名前が上り、彼女がリューネボルク殺害の自白をしたことが話題になっている。ルーツィエは語り手の幼なじみだったが、彼がこの町を離れてからあと、彼女の家の商売は失敗し続いて父母ともに死亡して、結局は姉と二人で孤児になってしまったとだけ聞いて

いた。彼女とは長い間会ってはいない。しかし語り手の故郷再訪にはどうやらルーツィエ訪問の意図があったように思われる。すでに自分の両親も住まぬ町であるのに、人目に付かぬよう気を遣いながら滞在し、そしてルーツィエの事件を聞いた後で、「彼女の愛らしい姿は、これほどの長い年月の間も、私の心からぬぐい去られることは一度もなかった。[…]こんなやりかたで一家のことを思い出させられなくても、訪問をなおざりにすることなど決してなかったであろうに」(388)というつぶやきを何気なく漏らす。この冒頭の語り手の態度にすでに彼のルーツィエへの特別な感情が暗示されていると言えよう。

ルーツィエの犯行とやらを詳しく知るために、語り手は父の知人であったＳ牧師を訪問し、彼の話を読者に伝える。Ｓはルーツィエの聴聞師に指名され彼女から直々に告白を聞いているという。しかし語り手はＳの話をそのままには再現しない。その伝達(再現)の仕方は、「彼がその場で話してくれたことを、後になって初めて私が直接の情報源からうち明けられた話で、訂正したり補ったりしながら、ここに伝えよう」(388)というものである。それは一見、学者ならではの客観性を見せているようではある。そして語り手はこの段階で、事件の全容およびそれ以外の経過もすべて知った上で語っていることも知らせている。それは回想録であれば当然のことであろう。語り手は、事件の結末(解明)まで全てを知った上で、読者に対しては、情報を入手順ではなく、その時々に必要と思われる部分を優先的に提供することにより、無駄を省き、経過を分かり易く伝えようとしていると言えるのかも知れない。しかし仮に探偵物語のスタイルを保とうとするならば、語り手はこの場ではＳから得た情報に限って報告すべきであろう。時間の経過とともに集積されてゆく情報をもとにして、順次事件の真相を推理してゆくという形式が尊ばれるべきである。もちろんまだこの作品成立時にはシャーロック・ホームズ・シリーズのような探偵物語のスタイルは確立されてはいなかった。しかし細部を積み重ね推理を進めながら筋を展開して、読者の興味を惹き続けようとするならば、あえてこんな合理的で素っ気ない語り方を採用しはしないであろう。むしろ読者には事件の解決されてゆくプロセスに参加することを促し、語り手はその先頭に立って水先案内をしているような姿勢を維持したであろう。しかしこの作品の語り手はそのような姿勢に一貫性を持たせようとはしない。それゆえヴィーゼの言う犯罪(探偵)物語説はすでに疑わしくなっている。

さて両親の死後、姉妹は二人でささやかな手仕事で暮らしを立て、片隅の暮らしに満足していた。そこへ中尉リヒャルト・リューネボルクが通うようになる。「アンナ(ルーツィエの姉)に対する彼の愛はきわめて誠実に表され、確実な生活保証を約束していた。」(388)しかしこの穏やかなはずの恋愛に一つの影がさしている。すなわち語り手はそこに一つの三角関係を示唆するのである。「彼を心から愛してはいるが表面的にはもの静かなアンナと対照的に、ルーツィエの陽気な人柄は、リヒャルトの朗らかな屈託のなさと実にうまく調子があった。三人は三つ葉のクローバーのようで[…]。うち解けた夕べの語らいに、姉が許婚者の手を静かに握っているとき、ルーツィエは反対側から義兄の肩にもたれてもよかったのだ。」(388f.)三つ葉のクローバーのような関係 ── たとえそれが真実であったとして、この情報を語り手はどのようにして手に入れたというのだろう。作品の最後まで追ってもルーツィエがこのような告白をした様子はない。Ｓの話と世間の風評に語り手は従っているとしか思えない。それは単なる状況証拠に過ぎないのではないだろうか。しかし読者はこのような語りを聞かされると、事件の裏には三角関係のもめ事があったのではないかと予測を立

ててしまう。これが語り手の戦略である。実は語り手はルーツィエのセクシュアリティーが気になって仕方がないのである。このくだりにとどまらず、語り手はしきりにルーツィエのセクシュアリティーを事件に関係づけようとしているように見える。そのことは、アンナとリューネボルクの関係の具体的な崩壊と、その後のアンナの(落胆による)死について伝達するときに、もっとはっきりと窺える。

リューネボルクは転勤したが、しばらくして戻ってきた。いよいよ結婚かと期待されたが、彼の人柄は豹変していた。「婚約者に対して粗野で卑劣な態度を示すことも希ではなかったが、そのための機会を彼は至るところに求めた。」(389)彼は「アンナの弱点である、嫉妬しやすい傾向」(389)を利用しようと、妹に「あらゆる面でよい顔をする」(389)ことで、自分はアンナには忠実ではないことを示し、彼女に愛想つかしをさせようとした、と語り手は報告する。しかしこのような内部事情を知っている者がいるとすれば、アンナとルーツィエしかいないはずであるし、アンナ亡き後、妹が姉のことを嫉妬深いと呼んだり、自分が恋人たちの離別の口実にされたなどと告白したりするであろうか。すくなくともテクストからはそのような痕跡は発見できない。語り手は客観性を装いながら、実は確実な証拠や証言に従わず、自らの憶測に基づいた独断を伝えているのである。ルーツィエ自身から得られた証言として確実なものは次の部分であろう。

リューネボルクに捨てられてから八ケ月も経たないうちにアンナは死亡するが、一人残された「ルーツィエの苦しみを思ってみるがよい。この世の最愛のもの、身近な唯一の支え、いや、彼女のすべてがアンナとともに死に絶えたのだ。しかしこのような苦しみに抜きがたい棘を刺したものは罰せられないでいる不実な男への無力な憎しみ、善良な姉が早々と屈しなければならなかった残酷な運命への思いであった。」(390)この部分は語り手がSを通して知ったか、あるいは後にルーツィエ自身の口ずから聞いたかのどちらかであろうが、いずれにせよ、ルーツィエの自白に基づいた彼女の心情の記録として当局に残されているはずである。事象を創作せず客観的に報告しようとするならば、この程度の内容しか伝えられないはずである。しかしそれだけでは語り手は満足せず、ルーツィエのこの恨みには、同時に彼女の後悔、すなわちリューネボルクの気を惹いていた自己を恥じる気持ちが絡んでいると、考えようとしている。語り手にとって、ルーツィエは自己のセクシュアリティーを制御できず、姉の婚約者を誘惑してしまった罪の女であり、今は自己を恥じ後悔していなければならないのである。しかしこれは、語り手の嫉妬が生み出した一方的な断罪であり、また、後に述べるが、子供時代から感じていたルーツィエへのコンプレックスを語り手が解消するためにも、どうしても行わざるを得ない彼女への悔恨の要求であったと言えるであろう。

さて、姉の死後4週間ほどして、リューネボルクがこの町から遠からぬ庭園で刺し殺されていた。大部分の人はこの犯行を決闘によるものと判断したが、真の下手人は捕まらない。突然ルーツィエが自首してくる。「自分は、哀れな姉の殺害者である中尉を殺した下手人であり、自分は死にたいと思っている、慈悲は求めない」(390)と言う。彼女は人の心を動かさずにはおかない誠実さで、姉の長所ならびに苦悩と死について、そしてそれに対する婚約者の奸譎を描き見せて、人々を感動させる。「このような事柄については(法律的正義に携わる)あなた方の法律書はなにも知りませんね。あなたがたが関わりをもたれるのは、辻強盗、人殺し、泥棒です！飢え死にすまいと裕福な隣人の持ち物に手をかける乞食も ── もちろん捕まります。しかし、ある悪者が傲慢にも、気高いす

ばらしい心の持ち主を、ありとあらゆる誓いの言葉でもって自分に縛り付けながら、その挙げ句に騙し、冷酷に虐待し、踏みにじって辱しめたとしても、そんなことはあなた方には、ほとんど、それどころか全く問題になりませんのね。」(390)アンナの悲劇はクラリッサ・ハーロウのそれのようである(注4)。これはほとんど名誉の問題であろう。しかし名誉の問題は法では裁かれない。ルーツィエが男であったなら、姉の名誉を回復するため決闘を申し込むことができたであろう。しかし女である彼女にはどのようにして仇を討ち、姉の名誉を回復できたであろうか。それゆえ彼女はリューネボルクを彼女自身の手で殺害した、と言い張るのである。「魔が差したように、あなた(姉)の辱しめられた魂を血で鎮めようとしたこの手を、あなたが呪うなんてことはあり得ないし、これからもそうでしょう」(391)と言って、リューネボルクを殺害したことが当然の制裁であることを示そうとする。「でもこれ以上私は生きていてはいけないのです」、(391)「お慈悲の心をお持ちならば、私の判決を長く遅らせたりなさいませんように、またこれ以上のことは何も尋問なさいませんように希望いたします」(391)と、即刻の死刑判決を願うのである。聴く人々を感動させたとはいえこのような単純な自白を、もちろん審問官は信じない。彼女が潔白ではないにしても、多分ほかにいる共犯者の殺人罪を引き受けているのであろうと考える。この時からルーツィエは獄中の人となるわけであるが、しかし裁判所が彼女を監禁する目的は、彼女から真相を聞き出し、彼女は殺人を犯してはおらず、その点では無実であると自白させることにある。無実であることを自白させるという奇妙なパラドックスができあがる(注5)。

彼女が獄に繋がれている間に、人々の噂が立つ —— 彼女がリューネボルクに愛情のあるふりをして、例の庭園で逢い引きを繰り返し、ついに彼を殺害したと。彼女による殺害だけではなく、彼女の貞操も世間は疑う。女性に対して世間は特にその貞操に厳しい目を向ける。裁判所自体はそのようなゴシップを毛頭信じておらず、それゆえこのようなゴシップを読者に提供することなど、事件の解明には不必要な逸脱事であり、探偵的な分析的文体にはこの部分は適切ではない。しかし語り手はわざわざこのような噂を採録して、世間のモラル観を示す。しかしそのような根も葉もない噂を流す世間に対して、語り手は義憤を覚えている様子もない。むしろそのような口さがない世間を是認している節すらある。こうして語り手は、世間と同様に、自分自身もルーツィエの貞操が気になって仕方がないことを、漏らしてしまっているのである。

事件解決には無関係なゴシップをこのようにわざわざ報告していながら、探偵物語にとっての重要度という点でははるかに優った情報が、Sの話の末尾に付け足しのように書き添えられる。すなわち、「中尉の知人でオステンエッグ大尉という者が、ルーツィエ投獄の後すぐに姿を消したが、種々の点で疑わしく見えたそうだ。すぐさま追跡が行われ、昨日捕縛された。これが何かの手がかりになるかどうかは、ほどなく明らかになるに違いない」(391)という、実態解明の進展にとって多分重大であろうと思われる情報が、これだけの簡単な記述によって追加されているだけなのである。真犯人の犯行の動機、方法、結末を知りたいと期待していた読者は、この情報の方に強い関心を抱くはずである。とにかくこの回想録は事件から少なくとも数年以上経過して書かれたものであり、事件の実態については語り手は全て知っているわけであるから、それを犯罪物語的なスタイルで伝えようとするならば、読者の探偵的興味を満たすような情報の伝え方をするべきである。しかし語り手はその期待をまたもや裏切るのである。

II

女囚の口から真相を聞き出したい語り手は面会を希望し、翌朝それが実現するのであるが、その前夜、眠れぬ語り手はルーツィエとの様々な子供時代の思い出に耽ったと言う。そしてその回想に読者もつきあうように要請する。「読者諸氏は、この不思議な物語の解決をご覧になる前に、私の一つのささやかな(思い出)話を聞きながら、この夜の焦燥を少しでも私と共有してくださっても、よろしいでしょう。」(392) オステンエッグ逮捕の知らせは事件の解決を暗示しているのに、語り手はその報告を先延ばしにする。探偵物語らしい物語の経過は無視され、エピソードへの逸脱によってわざわざ緊張感を削ぐようである。しかもこのエピソードが作品全体のほぼ三分の一の分量を占めるのである。読者はいささか腑に落ちぬ思いを抱きながらも、この脱線はひょっとして、現在の事件とルーツィエの少女時代との何らかの関連、あるいは現在の彼女の自白の必然性を知るために、必要な情報を与えてくれるかもしれないと判断し、語り手の要請に従うのである。実はこのエピソードは物語の隠された主題を解明するためのキーとなる部分であり、事件とは直接的には無関係でありながら、これだけの頁数を付与されていることですでに、この犯罪物語のスタイルが一つのカムフラージュ機能を持っていることを暗示しているのである。

エピソードは二つあるが、その一つ目はこうである。裕福な家庭に育っていたルーツィエと「私」は、X公爵夫人の誕生日のお祝いに野外劇場で上演される子供芝居に出演する。しかしその途中で嵐が襲い上演は中断され、二人して帰宅するよう仔馬に乗せられたが、その仔馬が突然疾駆し、ふたりは振り落とされそうになりながら、牧場近くでようやく馬から解放される。しかし仔馬は死んだように横たわり「私」はうろたえる。しかし牧場の人により仔馬は何ら損傷を受けていなかったことを知らされ、二人はほっとして帰宅するというもの。もう一つのエピソードはその後日譚で、ルーツィエが、「私」の舞台衣装に使われたターバンの高価な留め金を盗んだと疑われるが、やがては彼女の無実が判明したという話である。これら二つのエピソードは、現在の事件とは殆ど関連がないように見えるが、読者は読書経験から好意的に判断して、結果としてそれらを、獄中のルーツィエの無実が判明するということの「伏線」と見なし読み終えるであろう。しかしその程度の機能を持たせるために、これほどの長いエピソードが必要であっただろうか。むしろ犯罪物語としての緊張感を削ぐという逆効果の方が、問題ではなかろうか。これらのエピソードは、おそらく作品の評判を悪くする大きな原因になってきたことであろう。しかし我々は『ルーツィエ・ゲルメロート』を犯罪(探偵)物語と決めつけた、そのような先入観をそろそろ捨てなければならないのである。

事件の分析的な報告を進めているように見えながらも、これまでに述べたように、語り手は余りにもルーツィエのセクシュアリティーに拘泥しすぎている。たとえば、姉とリューネボルクとルーツィエの間に三角関係が存在し、ルーツィエはその時の自分の態度に悔恨を抱いている、と勝手に決めつけたり、あるいは世間の人々はルーツィエがその性的な魅力でリューネボルクを誘惑し殺害したと噂している、というような低俗な情報をわざわざ伝えたりして、語り手はとにかくルーツィエのセクシュアリティーを問題にせずにはおかないというような拘りを見せるのである。そしてそのような語り手の姿勢を考慮に入れてこのエピソードを読み直すと、そこには溢れるほどの性的な暗示とシンボルが発見されるのである。上演を間近に控えたときの雰囲気と気分を語り手はこう述

べる。「空は少し曇り、空気は穏やかで生温かった。しかしオランジュリーの豪奢な香りが私のほうへ漂い流れ、栗の木陰からすでに幾百の灯火が煌めきを送ってきたときには、不安と誇らしさの混じった期待で、私の胸はどんなに膨らんだことだろう。」(393) この文章は上演直前の喜びと恐れを表現したものであるには違いないが、その裏に含意されているものは少年の性への期待と不安である。南国の植物の匂いとなま暖かい空気は、性的になまめかしい気分のシンボルである。芝居のなかでは、「私」はトルコの寛大なスルタンの役を演じる。そしてルーツィエの役柄はキリスト教徒の女奴隷である。「最後のトロンボーンの音色とともに、緞帳のまだ上がっていない舞台に、あの女奴隷が登場した。なよやかな両腕には鎖をかけられて、彼女は人の心を動かす嘆きの声をあげた。」(394) 生殺与奪の権力を握った男スルタンと、縛られた女奴隷。少年はルーツィエに対してほとんどサディスティックな感情を抱いてしまいそうである。しかし女奴隷は美しい魂の持ち主であり、天使のような存在となり、スルタンから寛大な扱いを受ける。彼女は「その美徳、すなわち、この異教徒(スルタン)からさえも同情と賛嘆を引き出したその崇高な信仰によって、ある健気な一家を救う守護天使になるということだった。」(393) 少年はルーツィエを思うままに扱い、彼女のセクシュアリティーを管理する優位な立場に立たねばならない。それは「男による女性の抑圧と絶対的なコントロール」(注6) によってのみ可能である。そしてルーツィエは天使にならなければならないのである。このようなスルタンと女奴隷の関係は、語り手が理想とする男女関係の形であり、同時に時代のモラルを反映しているともいえよう。

嵐による芝居の中断後、疾駆する仔馬に連れ去られるときも、「私」にとっては、馬から振り落とされる不安よりも、ルーツィエに抱きつかれていることのほうがはるかに重大なのである。「幸いにも私はしっかりと鐙に足をかけていたので、ぐらつきはしなかったが、ただルーツィエにしがみつかれていたので、胸は今にも押しつぶされそうだった。」(394) 彼の欲望は刺激されるが、性の不安の方が先行している。「彼女は、生まれつき勇敢で果断であったので、この絶望的な状況に程なく身を任せきった。それどころか、もし彼女の高笑いが痙攣的なものでなかったなら、この難儀のさなかでも、事態は彼女には滑稽に見えたことであろう。」(394) 自分に抱きつき高笑いする少女に、「私」は恐怖を抱いている。自分より早熟に思える少女の振る舞いが少年には恐ろしい。そして「抗い難くこの畜生のばかげた勇気の生贄になった者は、刻々、町や人々から、いよいよ遠くへ拉し去られていくのだと思うと、それはあらゆる想念にもまして恐ろしかった。」(395) 「私」にとって性に溺れることは「人間社会からの孤立」(注7) をも意味するのである。しがみついてくる少女に少年の性はくすぐられ、彼女の奔放さと大胆さに怖じ気づいているようである。そして町や人々から離れ野生の世界へ、文化から自然の中へ呑まれていくという恐怖も生じているのである。

疾走ののち仔馬が倒れて死んだように見えたときも、「そのため私は狂気のように振る舞った。けれど女友達は私よりも賢くて、子供じみた挙動を私にやめるように命じ、手綱をつかんで厚板にからませ、心和ませる燈火の方向へ私を引っ張ってゆき、誰かを呼びに行こうとした。」(395) 万事不安におののいている少年に比べて、少女は賢明で理性的であるように「私」には映る。これは自分よりも賢明な女性に対する一種の男性のコンプレックスの現れとも言えよう。しかし仔馬が無事生存していたことを知ったとき、「私は心底から溢れ出る喜びのために、すぐにもこの(牧場の)人の前に跪きたかったのだが、そのかわりにルーツィエが私の首っ玉に嚙りついた。それは感動的で優し

いというより奔放といえるほどだった」(395)と、またもやルーツィエのセクシュアリティーを意識している。「私」はルーツィエに賢明さよりも魔性を多く見てしまうのだ。しかし思わず本音が漏れる。「だが生涯でこれ以上に快い類似の体験はなかった。」(395)性の不安と喜びはアンビヴァレントな関係にあることを語り手は思わず漏らしている。少年は自分を凌駕する少女の理性的で賢明な性格と、それ以上に奔放な振る舞いに、ただとまどうばかりである。しかしそのようなとまどいは女性の側に問題があるのではなく、男性のコンプレックスを原因としているのではないだろうか。彼の見ているルーツィエの姿は、むしろルーツィエのあるべき姿であり、知性と情熱を兼ね備えた魅力的な女性像と呼んでしかるべきものとも言えよう。しかし語り手の求めているのは、万事控え目で且つセクシュアリティーを持たないような女性である。「私」は少女の奔放さにどこか喜びを感じつつも、恐れには勝てないのである。

二つ目のエピソードにおいてはこの傾向は一層強まる。泥棒の嫌疑の掛かったルーツィエを「私」は、(子供芝居の)嵐の夜よりももっと官能的な見方をする。「倒錯したような情熱と子供心にすでに働いている繊細な官能性によるもつれた織物に関することではあっても、この美しい女泥棒を見たときに私の内面に生じた魅力的な争いは、今日でもなお不思議に、恥ずかしいけれど不思議に思えるのだ。」(396)「[…]私は以前にもまして彼女に惹きつけられていた。彼女はその新しい不気味な特質によって、いっそう私の関心を引き、脇の方から彼女をこっそり眺めると、彼女が信じられぬほどに美しく魅惑的に感じられた。」(396)神秘的で誘惑的な(泥棒を犯した)「罪の女」に、性の芽生えた少年は強く惹かれる。それゆえ彼女が無実であったことが判明した時、「この突然の幻滅に、狼狽し恥じ入りながら、私の想像力があれほど心を惑わすように、見かけの女罪人に不自然な濡れ衣を着せていたことを知った」(396)と述べる。彼女の濡れ衣が晴れることは「幻滅」なのである。罪の女のほうが少年には密かな喜びをもたらすのである。しかしそのような女性を恐れる気持ちもやはり強い。市民男性に相応しい女性は、最後には天使であらねばならない。「一方ではいっそう愛すべき栄光が彼女のまわりに広がりはじめたのである。」(396)全くアンビヴァレントな心情である。淫らな罪の女を求める欲望と清純な天使を求める理性が少年時代の「私」には併存していた。そして現在の事件解明に立ち会っている成人の「私」も依然としてそのアンビヴァレンツに引き裂かれている。そのため語り手の回想はルーツィエのセクシュアリティーに関わるものばかりとなってしまい、彼女が少年にとって「魅力的になった原因としての罪」(注8)にもっぱら光を当ててしまう。「この場面をはじめ同様の場面を、私はあの不安な夜に次々と思い起こし、(今度の事件と)比較しながら重要な考察をいくつも試みた。」(396)犯罪物語の裏をかくような一連の語りを通して浮かび上がるのは、女性を一旦は犯罪者、泥棒、罪の女、淫乱な存在に貶めておいて、その姿に密かに快感を覚え、しかし次にはそのような女性の浄化を要求し、最後に天使になった女性を(スルタンのように寛大に許して)受け入れてやる、という男性のゆがんだ姿勢である。この身勝手で傲慢な姿勢を支えているのは、どうしようもなく偏見に満ちた女性観である。それは女性を魔性の存在と見なす。それは、男性のセクシュアリティーは男性自身の中から生じるものではなく、女性の悪魔性が引き起こしているのだとして、責任転嫁を行う。男性自身の意識についての問いかけはなく、専ら女性の中に潜むとされる魔性、反文化の自然性が糾弾される(注9)。そして、そのような野生のセクシュアリティーを持つ女性を訓育し改悛させ、「性のない天使」(注10)へと陶冶するのが、男の使命であるとさ

れているのである。

Ⅲ

語り手は獄にあるルーツィエに面会する。「すっかり蒼ざめてひどく悩んでいるように」(397)見えたルーツィエは、「読書中のキリスト教の本に話題を移し、その中の多くの良よきことを賛美した。」(397)こうして彼女は(時代の)キリスト教のモラルに従って、罪の女でなくなろうとしているようである。そしてその導きの直接の師を語り手に求める。こうして状況は語り手の希望するように進展するのである。「私には友人の助言が必要です。神があなたを私に遣わされたのです。何もかも聞いてください。」(397)彼女は幼なじみである語り手に次々と告白を始める。

アンナが埋葬されてようやく数週間ほどして、姉のことをリューネボルクよりも早くから空しく慕っていたパウル・ヴィルケンという商人が訪ねてくる。「普段は極く内向的で寡黙なこの男も、ルーツィエのそばでさめざめと涙を流した。」(397)そして「ルーツィエは反駁するが、パウルが、亡き人に対する愛をひそかに早くも生きた女性の方へ向けたということも、満更あり得ないことではないと私は思う。」(397f.)このように言う必要のないことをやはり語り手は挟む。ここには嫉妬も現れている。さてルーツィエは「もしあなたが男なら、姉さんの仇を討って」(398)と口にすべきではないことを、パウルにふと言ってしまう。六日後にルーツィエは、リューネボルクが死んだことと、それがパウルとの決闘によるものであることを密かに彼の手紙で知る。いまや彼女は自分は殺人を教唆したのだ、本当の意味での殺害者は自分だという罪悪感に捕われる。しかし真相は誰にも語れない。もしパウルのことを自分が漏らして彼が捕まれば、彼はルーツィエを信じたことを悔やむであろう。彼女は罪悪感と無力感に苛まれる。当時すでに決闘は禁じられてはいたが、たとえ決闘で人を死なせて告訴されても、せいぜい数ヶ月で釈放されるのがふつうであったから(注11)、それほどパウルの身の上は案じなくてもよかったはずである。しかし女であるルーツィエはそのような習慣を知らない。(もっとも、仮にパウルの罪が問われずとも、このような決闘の原因になった女性には、社会的な制裁が待っている(注12)。)パウルへの済まなさと殺人教唆の後悔に苛まれている彼女に、「[…]失った姉に対する痛々しい思いが新たに強さを増して現れた。亡き人への憧れは、孤独のために高められ、熱狂にまで達した。彼女は、夜の数時間にもわたる姉との対話によって、一種の感得可能な交流のなかに身を置くことができるように思った。それどころか、二人を隔てている壁を力ずくで取り去って、自分の無益で苦しみばかりの多い人生に終止符を打つという誘惑に、一時的とはいえ、早くもすでに触れられたのは、一度や二度ではなかった。」(398f.)このようにして死への願望の生まれる様が描写されている。世間から孤立し話し相手を全く持たないルーツィエは、それを亡き姉に求めていた。この独り言をいっている姿は人間の孤立の最も悲惨な姿であろう。孤立ゆえに、姉の世界に行きたいという願望、死への憧れが強まる。「あるうっとうしい雨の日のこと、少し前にアンナの墓前で心ゆくまで泣いたあとで、神の啓示のように突然、『私は死にたい、死ななければならない。正義そのものがそれに手を貸してくれて当然だわ』という途方もない考えが彼女の心に浮かんだ。」(399)

しかし自殺は罪悪だと難ずる声が響くので、彼女は自殺することはできない。しかし同じ声が、

「神は生から彼女を解放して安らかにし給う、彼女がそれを殺人罪の贖いに捧げるならば」(399)という矛盾した囁きを漏らす。しかしこの後の囁きに彼女は魂に光がさしたように感じる。彼女は相容れぬようなこの二種の要求を満たす方法として、自らが断頭台に上ることを思いつくのである。それにより「自分の殺人罪の贖いを神にゆだねた」(注13)ことになると思っているのである。語り手はこの自己暗示には「大いなる自己欺瞞」(399)が隠されているという。すなわち、彼女が迎えようとする死は願望実現としての死であり、贖罪の感情、本当の悔恨を呑み込んでしまう。愛おしい生を犠牲にするところに真の贖いはあるはずである。彼女の死は孤独から安逸への単なる逃避であり、殺人教唆への贖罪にはならないと語り手は考えているらしい。

ルーツィエは以上のような葛藤を経て自首をした。その時の彼女は、裁判官が彼女の自首をそのままに信じてくれ、自分はすぐに処刑されるのだと思いこんでいたのである。決闘には介添人や証人が存在し、そこから真犯人が分かるということに思いが及んでいない。語り手は、ルーツィエのこのような判断力の欠如を「女の考え」(weibliche Begriffe)と呼び、この理性の欠如した女性を教え諭して矯正し、理性的な生活に導くには、「男の考え」が必要だと言いたげである。

しかしルーツィエの「女の考え」も、次第に自分の行動は根拠がなく、倒錯したものであると見抜き始める。「私はどこへ落ちてしまったのか。[…]自らの網にこんなに深く絡め取られてしまった愚かな女を寛大に扱って下さい。[…]ああ、恥辱、不名誉！私はどうやって耐えられるでしょうか。」(399f.)殺人教唆をし、しかも「偽りの自首」までもしてしまった自分を、彼女は真に恥じるようになる。自己欺瞞を解かれた娘は、姉を亡くした絶望感に加えて、恥辱感にも苦しみ始める。このような混乱と孤立に苦しむ女性を救済し、世間のモラルに適った生活へと軌道を修正する役目は、まさに自分にあると語り手は思う。ルーツィエもこう言う、「神ご自身があなたを私に遣わされ、私に口を開かせたのです」(400)と。罪の女を救い出す男は自分をおいてほかにはないという自覚は、語り手を奇妙な幸福感で包んでいるようでもある。

ルーツィエとの面会を終えた語り手をＳの甥が訪ねてきて、昨日からすでに裁判所は事件の真相をつかんでおり、オステンエッグがパウルを助けて決闘に参加したことも判明していると告げる。しかも裁判所は語り手とルーツィエの対話を盗聴していたということも教えられる。そしてルーツィエ自身は語り手との面会後すぐに全てを、取調官に告白したという。それゆえルーツィエの釈放は間近のことなのである。

しかし昨日から事件の真相を知っていた裁判所が、どうしてルーツィエに直接その事実を伝えて、彼女の偽りの自白についての説明を求めなかったのか。わざわざ語り手との面会を設定して、それを盗聴するというような手の込んだことをしたのか。犯罪の解明を目的とする物語であるならば、ルーツィエの告白を聴くより、オステンエッグの逮捕や自白の場面の方が読者にとってははるかに面白いのではないか。しかしそのような読者としての疑問や不満を、我々はいまさら抱くことはあるまい。語り手にとって、オステンエッグやパウルを始め、ルーツィエ以外の事件の関係者のことなどどうでも良いということは、明らかである。ルーツィエとの面談こそ、語り手の内面に生起する事件にとっては、まさにクライマックスであり、是非とも描かなければならない出来事であった。語り手の真意は、ルーツィエという女性の道の踏み外しとそこからの回復を、しかも自分という男性を通じての回復を描くことにあったのである。

Ⅳ

釈放後のルーツィエについては、彼女がどのように絶望から回復したか、そして如何にして語り手の「妻」になったかという、後日譚の形で報告される。しかしそれは単なる後日譚にとどまらない。この部分があってこそ、物語のテーマが何であったのかが明瞭になるのである。すなわちノヴェレが報告している犯罪の顛末は表層的な話題に過ぎず、その根底に秘められた、ルーツィエの罪の克服と結婚という問題こそ、語り手が真に表現しようとするものであったのだ。しかしこの結論に満足せず、我々はさらなる問いを発しなければならない。このように問おう。語り手は結婚へのプロセスはまさにルーツィエの罪の克服にあったと考えているようだが、そこには彼自身の「大いなる自己欺瞞」が隠されているのではないか。女性の罪の浄化と結婚という手続きを通して、実は一つのプログラムが密かに実行されたのではないか。

エピソードから明らかなように、語り手にとってルーツィエは少女時代から神秘的で怪しい魅力を湛えた女であった。その不思議な魅力は、彼を魅了し且つ怖じ気づかせた。帰省旅行の際にも、彼のルーツィエに対する気持ちはそのようにアンビヴァレントなものであったのであろう。そこへ彼女の現在の事件が知らされる。ルーツィエはまたもや子供時代と同様、罪の姿を語り手に見せるのである。しかし成人している「私」は、子供時代のように無力で盗み見をしているだけの男ではない。その事件を利用して「私」は、彼女を自分に都合のよい女に作り替えようとする。(子供時代のように)彼女をいったん罪の女にして名誉を奪い、庇護と救済の必要な存在に貶めてから、その後で贖罪と浄化のイニシエーションを体験させ、最後に(キリストがマグダレーナにしたように)彼女を寛大にも赦して妻というポストを与える。このような視点で作品を読み直せば、逆にルーツィエの実像も浮かび上がってくるように思える。

ルーツィエは姉の恋人にあまりにも挑発的でありすぎたとか、パウルが決闘したのも彼女が蠱惑的であったからだ、などという独りよがりな評価を、語り手は、巧みに積み重ねながら、彼女を罪の女に仕立て上げてゆく。(子供時代から感じ続けていた)ルーツィエに対する恐怖が、このような複雑で持って回ったような、そして独断的でおおよそ客観的とは言えない語りを生み出し、ルーツィエの贖罪を必要不可欠なものだと決定づけるのである。そのためルーツィエの回復のプロセスは、性的な贖罪のプロセスに書き換えられてしまう。出獄時のルーツィエは、「自分は名誉を失い、世間の目の前で身を滅ぼし、いかさま師として嘲笑され、狂女として憐れまれていると思っていた。無感覚に諦めきって、彼女は世間に心ならずも引き返したのだ。未来は果てしなき砂漠のように彼女の前に広がっていた。彼女には自己の存在が空虚で蔑むべき嘘であるように見えた。彼女には、自分をどうすればよいのか、もはや分からなかった。」(401)ルーツィエの苦悩のなかに、姉への裏切りや男性への挑発的態度を悔いるものが一切なかったと我々には断定できないにしろ、彼女自身はそのような告白はしていない。最も激しく後悔させるものは、やはり殺人教唆と偽りの自白であったことは間違いないであろう。単純に言えば、彼女は世間に顔向けが出来ないのである。それゆえ彼女に必要なリハビリテーションとは、対世間コンプレックスの克服にあったはずである。

リハビリテーションの行われたのは、当該の町から離れて、「この地方のごく好ましい谷あいの地でその愛すべき家族とともに、真に家父長中心の生活をいとなんでいる」(401)村牧師の家庭であ

り、そこは「繊細な心映えの、生来朗らかな人々のサークル」[401]であったとされる。なるほど世間との関わりを徐々に回復するためには相応しい牧歌的な世界ではある。しかしそれだけにとどまってはいない。そこは「家父長中心の生活」が営まれる場所、典型的な父系家族の男性中心の世界である。そこでは男性の価値観にそって「罪の女」は生まれ変わらなければならない。語り手は結婚の意図は伝えないままに、ルーツィエと「兄妹のように」[401]別れ、そのあと文通を続け、彼女の心に去来する出来事の完全な報告を要求する。彼女は、心理的コントロールともいえる文通を通じて罪を告白し浄化され、そして父系一族の宗教的薫陶を受けて、倫理的生活の新たな一歩を踏み出すように仕向けられる。二年後二人は結婚する。彼女はこうして語り手にふさわしい浄化された女、プロテスタント倫理に則って夫に仕える貞淑な妻となったのである。世間はまだ彼女への偏見を捨ててはいないようだが、語り手にはもっと大事なことが達成された。彼女は真の家庭の天使になったのである。「およそ一人の人間が別の一人の人間によって与えられる、最高の幸福を彼女に見いだし、私は神に感謝するのである」[402]という手記の結びの一文は、この消息を総括したものである。

リハビリテーションの再現に入る前に、語り手は告白している、「[…]この娘の運命にこれほども私を接近させたのは、同情や敬虔の念だけではなかった。私はルーツィエを愛していた[…]」[401]と。しかし彼は、彼女に対して恐怖とコンプレックスも感じていた。しかしあの事件とリハビリテーションのあとでは、「二人の運命は永久に離れられぬものだという密かな信念に、安んじて身を任せていることができたのである」[401]と言って、彼女への怖じ気をやっと克服できたことを、語り手は思わず漏らしている。もはや彼女の神秘的な謎に対するコンプレックスも消えた。彼女は語り手によって救済され、いまは彼女の方が語り手にコンプレックスを感じなければならない存在になったのだ。立場は逆転し、「私」の望む結婚生活が始まる。隠されたプログラムの達成である。このような語り手にとって好ましい成り行きを報告して手記は終わる。読者は見事に語り手の術中に引き込まれ、表面的な事件に幻惑されながら、彼の恋愛と結婚の経過を聴かされて、その独善的な結婚観を承認させられてしまうのである。

編者による「語り手の手稿はここで途切れている。私たちは彼の書いたもののなかに、あの逃亡中の商人(パウル)の運命について何かを知ろうとしたが、無駄だった。そのほかにも照会したが、やはり同じであった」[402]という作品末尾の言葉は、我々が発見したプログラムの生々しさを緩和するようである。我々も、『ルーツィエ・ゲルメロート』は犯罪物語のスタイルを借りた「結婚達成の物語」である、という結論で満足するべきかも知れない。とにかくこのイローニッシュなノヴェレは、語りのトリックを張り巡らせることによって、ビーダーマイアー時代の市民社会が育んでいた女性像と結婚観を、それと知られぬようにして、浮かび上がらせるのに成功しているからである。しかしそれと同時に、男性がコンプレックスを都合よく女性に転嫁して婚姻を達成するというプログラム、この無意識のうちに実行されるプログラムをもまた、この作品は透かし見せているということも、新しい発見として加えておこうと思うのである。

注

(注１) この作品は、1834年に*Miß Jenny Harrower*という題名で『ウラーニア文庫』に発表される。それが1839年に稿を改められて、*Lucie Gelmeroth*という新しい題名で作品集『イリス』に再登場し、その後1856年にさらに手を加えられて『四つの物語』を構成することになる。本論文の引用は、第三の稿に基づいた次のテクストから行われ、引用末尾の数字は同テクストのページ数とする。

Mörike, Eduard: *Lucie Gelmeroth.* In: Ders.: *Sämtliche Werke in zwei Bänden.* München 1968, Bd.1.

(注２) Wiese, Benno von: *Eduard Mörike.* Tübingen und Stuttgart 1950, S180.

(注３) Vgl. Arnold, Silke: *Eduard Mörike und das Rätsel der >Lucie Gelmeroth<.* In: Reiner Wild (Hrsg.): *Der Sonnenblume gleich steht mein Gemüthe offen.* St. Ingbert 1997, S.92.

(注４) T.イーグルトン著(大橋洋一訳)『クラリッサの陵辱』(1999年、岩波書店)参照。

(注５) Vgl. Steinmetz, Horst: *Eduard Mörikes Erzählungen.* Stuttgart 1969, S. 82.

(注６) Arnold: a.a,O., S. 109.

(注７) Ebd., S.102.

(注８) Schlaffer, Hannelore: *Nachwort.* In: *Eduard Mörike. Sämtliche Novellen und Märchen.* Berlin 1993, S. 277.

(注９) Eichner, Hans: *Zur Auffassung der Sexualität in Eichendorffs erzählenäder Prosa.* In: Michael Kessler und Helmut Koopmann (Hrsg.): *Eichendorffs Modernität.* Tübingen 1989, S.42.

(注10) Ebd. S.48.

(注11) これは主に貴族と軍人に当てはまるが、市民(商人)の場合でも、恩赦によって刑は軽微なものになった。

マルタン・モネスティエ(大塚宏子訳)『決闘全書』(1999年、原書房)参照。

Vgl. Arnold: a.a.O., S. 92.

(注12) Vgl. Ebd., S.93.

(注13) Lenhardt, Gertrud: *Mörikes Märchen und Novellen.* In: *Zeitschrift für deutsche Bildung* 10(1934). S. 354f.